

小田原史談

第52号

明治百年記念号

明治百年記念特別号

(内 容)

○小田原明治百年秘史展解説

小田原明治百年のあゆみ (2)

○明治百年雑記

酒匂川決壊と水害状況 井上英一 (9)

明治百年に際して 清水専吉郎 (12)

小田原郵便局の始めと変遷 清水専吉郎 (13)

明治百年小田原の謡曲界懐古 清水専吉郎 (13)

小田原を中心とした交通年表百年史 額田喜代春 (14)

二・二六事件の思い出 東海俊美 (17)

五十年の板橋 小林泰助 (17)

組のお稲荷さま 宇野応之 (18)

●明治百年記念特別展覧会

小田原明治百年秘史展

●43.10.25 ~ 43.11.17 午前9時~午後5時

●会 場 小田原市郷土文化館

小田原市郷土文化館・小田原史談会

小田原明治百年のあゆみ

小田原明治百年秘史展解説

◎明治元年(一八六八)五月二十日・二十八日
箱根戊辰戦争が起つて、小田原藩が遊撃隊と戦つた。

明治戊辰小田原箱根戦争

慶応三年十月十四日、將軍慶喜は大政奉還をしたが、佐幕派の諸藩や論者がこれに不服を示し、翌明治元年正月、前將軍慶喜がこれらに奉ぜられて兵を挙げ京都の鳥羽伏見で、官軍と戦つて敗走したのを皮切りに、江戸の上野の戦、甲州の勝沼の戦、下総の流山の戦、越後長岡の戦、会津若松の戦、二本松の戦、陸中宮古湾の戦、北海道函館の戦というように次々と各地で勤王対佐幕の戦が行なわれた。小田原箱根戦役も、この維新戦争の一つである。

伊庭八郎は、江戸で佐幕派の旗本の二・三男を集めて遊撃隊を組織し、隊員を引率して上総国請西に至り藩主林昌之助忠崇を説いて隊の総統に押し立て、四月十日安房国館山港を出発して、十二日真鶴港に上陸、林総統ら四人が小田原に来て、城代家老の杉浦平太夫と同じく家老の渡辺了叟に面会し、佐幕に同盟するよう強要したが、要領を得なかつたため落胆して、真鶴を去って熱海に行き、約一ヶ月甲駿豆地方を転々として、同志を集めたが思うように行かなかつた。そこで遂に、箱根山を突破して江戸に帰ることになり、伊庭八郎指揮下の遊撃隊二百八十名は箱根山に進撃し、二十日関所の西側に布陣して、いよいよこの日の夕刻から戦闘が開始された。これを箱根関門の戦いという。

ところが一方、この間に小田原では、佐幕・勤王の意見がたかかわされた結果、佐幕論が急に強くなり、戦闘を休戦させ和議を成立させた。小田原藩軍と遊撃隊は急に合流して、相携えて小田原城下に入る

ことになったが、その途中元箱根に在陣中の官軍隊士の宿舎を襲撃したのは目も当てられぬ惨事となった。

かくて箱根の小田原藩兵と遊撃隊は意気揚々と小田原城下に入りこんできた。

三雲軍監は、小田原藩から九死に一生を得て江戸に急行し小田原の急変を官軍に報告したから、江戸でも騒ぎとなった。

この時江戸詰で藩の監察職にあった中垣秀実(謙斎)は小田原が佐幕に加担しているのを聞き、急きよ小田原に帰り、渡辺了叟らを中心とする佐幕派の人々と論争し、天下の情勢を語って勤王論を説き藩論を逆転して勤王に一決した。

そこで藩主忠礼は一時的にも官軍の人々をあやめたる非で城中に謹慎し、城下に屯する遊撃隊には二十五日朝までに小田原領外に退去するよう宣言し、二十五日午后になりようやく腰をあげて箱根に向って進行したが、箱根の入口に達するや急に戦闘体形をとり小田原兵をむかえた。五月二十六日午後二時頃から銃砲戦、やがて白刃相打つ血戦が展開せられた、これを箱根山崎の戦という。

遊撃隊の抵抗は頗る頑強で、容易に勝敗のめどがつかず、日落つる頃になって猛烈な白兵戦となり、隊長伊庭八郎が重傷したことは遊撃隊の致命的打撃で、午後七時頃遊撃隊は敗れて箱根山中に四散して逃亡し、小田原の勝利に帰した。

戊辰小田原箱根戦役の戦闘は終わったが、官軍の小田原藩への責任追及はきびしく、関係者が江戸に送られた。このとき小田原六家老の一人岩瀬大江進は、藩士の佐幕、勤王両論の中に立って奔走したが、官軍側から小田原藩の佐幕派に傾いた処置について痛烈な叱責をうけ、遂に罪が藩公に及ばんとする気配になって来たので、責任を感じ「奉遺願候一札」という長文の家老衆宛の血判書を残して、六月十日自宅で自刃した。

九月二十三日、山田竜兵衛、小泉彦蔵の兩人が軍監吉井頭蔵殺害の罪によって、江戸郊外の鈴力森の刑場において死刑となった。十月十日になって永く江戸に拘禁されていた渡辺了叟が小田原に送

りかえされてきた。藩において適当に処置せよということであったが、それは藩で処刑せよという暗示であった。渡辺はこの日あることをかねて覚悟していたのであろう。その日の早朝、自宅で切腹した。

◎明治元年九月二十七日

大久保忠礼が戊辰の役の不始末によつて、永蟄居を命ぜられた。

◎明治元年十月一日

大久保忠礼養子忠良が小田原城主となった。(七万五千石)

明治元年九月二十七日、朝廷は小田原藩主大久保忠礼に永蟄居を命じ、藩の石高十一萬三千石を減封して七萬五千石とし、併せて、支藩の荻野大久保家から忠良を迎えて継嗣とさせた。そして忠良に小田原藩を襲封せしめた。これで小田原の維新の騒ぎは一応落着した。

◎明治元年十月八日

明治天皇が御東行の途中本陣清水金左門方に御宿泊になった。

◎明治元年十一月十六日

北村透谷が唐人町に誕生した。

明治文学の先駆者として不朽の名をとどめた北村透谷は明治元年小田原市浜町三丁目(旧唐人町)に医師北村快蔵の長男として誕生した。本名は門太郎後に東京数寄屋橋の側に寓居して透谷と号した。常に生活の困苦と闘いながら短かかった生涯に多数の評論を書き小説を作り抒情詩、劇詩、戯曲、伝記をものこした「楚囚之詩」「蓬来曲」などはその代表的作品として知られるものである。

殊に明治二十六年一月島崎藤村・平田秃木・戸川秋骨などと雑誌「文学界」を起して透谷が中心となって新しい日本文学の確立を目指して活動し、盛んに浪漫思想を唱えて以って近代浪漫主義文学の先達と言われる業績を残したが、明治二十七年五月十六日、二十七才の若さで自ら生命を断って歿した。

墓は東京芝白金台瑞聖寺に営まれたが、昭和二十九年五月濱竹と共に小田原谷津の高長寺に移された。

◎明治元年十二月九日

明治天皇が京都御還行に際し、清水本陣に御宿泊になった。

◎明治二年正月

箱根関所が廃止された。

◎明治二年三月二十五日

明治天皇が再度御東行の際清水本陣に御宿泊になった。

◎明治二年四月十七日

大久保忠良が藩籍奉還を願い出た。

◎明治二年六月十九日

小田原藩の藩籍奉還が許されて大久保忠良が藩知事になった。

四月十七日には、藩主忠良は諸藩と共に上表して藩籍奉還を請い、六月十九日聴許せられた。忠良は小田原藩の藩知事に任ぜられ、従五位下相模守に叙せられた。そして十月四日には養父忠礼の永蟄居も免ぜられたのである。

◎明治三年十月十二日

小田原城の廢城と取り払いを願い出て許可せられた。

◎明治三年十一月十日

小田原城の天守閣と櫓四棟を九百両を以つて払い下げた。

小田原城は明治三年十月、秋來の暴風雨に大破して、藩力では修補し難いため、廢城と致したい旨を朝廷に願ひ出て許されたので、十一月十日になり、天守閣一棟、櫓四棟が九百両を以つて、高梨町平井清八郎に売却せられたから、これらは直ちに取壊しとなり、武家政治の象徴も姿を消してしまつた。

◎明治四年七月十四日

小田原藩を廢して小田原県が置かれた。

◎大久保忠良が藩知事を免ぜられた。

◎明治四年十一月十四日

小田原県を廢して、今の神奈川県の地は、足柄県と神奈川県となった。

◎明治五年四月十三日

藩校集成館が廃せられ新しい制度による小学校として日新館ができた。
明治時代小田原の教育の変遷

(小 学 校)

- 明治 二年 集成館の校名を文武館とし、庶民の子弟でも好学の熱意あるものは聴講を許す。
- 明治 五年 藩校集成館が廃しされ日新館ができた。
- 明治 六年 新玉の本源寺の本堂を借りて、啓蒙館(小学校)が開校。宝安寺の本堂を借りて一丁田学校(小学校)が開校。
- 明治 七年 啓蒙館は男子学校、日新館は女子学校とし、一丁田学校は小学校上級生の男女混合とした。
- 明治 八年 日新館分校は独立して西海子学校となる。
- 明治 八年 日新館は幸学校、啓蒙館は新玉学校と改称。
- 明治 十年 幸学校が宮の前学校と改称し、宮小路に新築された校舎に移る。
- 明治 十年 新たに幸田口に緑学校が新築。
- 明治 十二年 幸学校を開設して宮の前学校と一丁田学校の生徒を移し、宮の前、一丁田両校は廃校となった。新玉学校を廃して生徒を緑学校に移した。
- 明治 十三年 啓蒙学校を設け、西海子、緑両校を廃止し、幸学校・啓蒙学校の二小学校併立となる。
- 明治 二五年 両校を統合して啓蒙小学校となり、旧啓蒙学校を啓蒙小学校男子部、旧幸学校を啓蒙小学校女子部と呼ぶ。同年四月十一日両校とも火事にあい全焼啓蒙小学校の名を改めて尋常高等小田原小学校として出発。
- 明治 三三年 旧日新館跡の新社舎へ高等科を移し、高等小田原小学校とし、尋常はもとの校舎で尋常小田原小学校として分離する。
- 明治 四一年 高等小田原小学校は、第一尋常高等小田原小学校(本

(中 学 校)

- 明治 五年 御兵御殿を借りうけて中学校・小田原英学校が開校された。
- 明治 七年 小田原英学校は名を講習所と改称し、十一月に残りの生徒を皆修了させて廃校となった。
- 明治 九年 講習所は整備されて改称し、小田原師範学校となった。小田原師範学校が廃校になり、これに代って郡立中学校が設立。
- 明治 十二年 郡立中学校廃校、郡立小田原英語学校設立。
- 明治 十九年 郡立小田原英語学校廃校。
- 明治 二十年 私立英和学校開設。
- 明治 二一年 私立英和学校廃校。
- 明治 二三年 神奈川県立第二中学校開校(県立小田原高等学校の前身)
- 明治 三四年 小田原町立小田原高等女学校(県立小田原城内高等学校の前身)
- 明治 四一年 小田原町立小田原高等女学校(県立小田原城内高等学校の前身)
- 明治 三八年 (私立女学校) 小田原家政女学校開校。
- 明治 三九年 新名裁縫女学校開校(私立新名学園旭丘高等学校の前身)
- 明治 四五年 石井裁縫女学校開校。
- 明治 八年八月二十九日 小田原の町内の区制を改めて、新玉、万年、緑、幸、十字の五町名に分けた。
- ◎明治九年四月十八日 足柄県を廃して神奈川県に編入し、神奈川県小田原支庁が置かれた。

- ◎明治十一年七月
神奈川県小田原支庁を廃止して、足柄下郡役所が置かれた。
- ◎明治二十年七月十一日
新橋、国府津間の鉄道が開通した。
明治維新の新政府となり、鉄道の敷設がとりあげられ、明治五年（一八七二）九月には、東京新橋と横浜の間に開通したが、小田原地方まで延長されたのは、それから十五年も後のことである。明治二十年（一八八七）七月十一日、新橋、国府津間が開通し、明治二十二年（一八八九）七月には更に神戸まで達して東海道線が全通したのである。国府津駅の設置は当時、小田原・箱根地方への唯一の玄関口であったから、この地方の新文化に大いに貢献したが、一方、東海道の路線は箱根越えに際し、峠の最も低い酒匂川ぞいに御殿場を通ってしまつたので、小田原町は交通上からとり残された形となつてしまつた。
- ◎明治二十一年十月一日
国府津、小田原、湯本間に小田原馬車鉄道が開通した。
東海道線の国府津駅が開設したことに刺戟されて小田原の吉田義方以下七名の有志により、小田原町の交通の便を図ることと、箱根・熱海への温泉客の増加を目的として、国府津・小田原・湯本間に小田原馬車鉄道の敷設を計画し、明治二十一年（一八八八）十月一日から営業を開始した。（国府津、小田原間三十分、一人六銭、小田原、湯本間三十五分、一人八銭）当時の鉄道唱歌にも
国府津あるれば馬車ありて
酒匂小田原遠からず
箱根八里の山道も
あれ見よ雲の間より
と歌われている。
- ◎明治二十二年四月一日
町制がしかれて小田原町となつた。戸数三千、人口約一万六千人。
- ◎明治二十三年十月
伊藤博文が小田原に別荘滄浪閣を建設した。
- 滄浪閣の場所は本町四十一・二十二で、明治二十三年十月に竣工し十月二十四日から明治二十九年二月大磯の滄浪閣に移るまで居住した。その間明治三十一年から施行された民法の原案起草をした地である。起草委員は穂積陳重、富井政章、梅謙次郎の三人で明治二十七年五月頃から秋まで一室に宿泊して民法第一章「人」が書かれた記念の場所である。
- ◎明治二十七年五月十六日
北村透谷が没した。
- ◎明治二十九年三月
小田原・熱海間に人車鉄道（豆相人車鉄道株式会社）が開通した。
小田原から伊豆方面に通ずる下田街道も従来交通機関がなく非常に不便を感じていたが、明治二十九年（一八九六）三月、豆相人車鉄道株式会社（社長雨宮敬次郎）の経営で、軌道の上に箱車を乗せて人夫が押して行くという人車鉄道が、小田原電鉄十字町停留所から出発して熱海まで運転された。（一日六往復、小田原・熱海間上等一円、中等六十銭、普通四十銭）
- ◎明治三十三年三月二十日
国府津・小田原・湯本間に電車が開通した（小田原電気鉄道株式会社）
明治二十一年に開通した馬車鉄道を、小田原電気鉄道株式会社（社長中野武管）の手により、明治三十三年（一九〇〇）三月二十日から電車で代えられた。（国府津・湯本間・一時間、上等九十三銭）
- ◎明治三十三年五月
電燈がはじめてひかれた。
- ◎明治三十四年一月
小田原城址に御用邸が建設された。
小田原城内に御用邸建設の計画があることが伝えられたので、小田原町もその光栄に浴したき由を出願した。一方大久保家に於ても、同家の所有地である本丸、二の丸を平塚の御料林と交換することが成立した。
- その結果、小田原町も大久保家から買受けた地の一部を宮内省に売却

することになったので、御用邸建設が本決まりを見るに至った。

御用邸建設後は、明治天皇の皇女常宮（昌子内親王）、周宮（房子内親王）両殿下は御成婚まで毎年、避寒遊ばされ、大正天皇も東宮時代にはしばしば、御用邸に御滞在になった。

◎明治三十四年四月二十九日

神奈川県立第二中学校（現在の小田原高等学校）が開校した。

◎明治三十五年九月二十八日

◎小田原大海しようが起つた。（死亡十二人、流失家屋二九三軒、全潰家屋一四四軒）

明治三十五年九月に小田原は大海しようの襲来をうけたが、これは直接被害の甚大であつたのと、その後の影響が多かつたので、小田原史上この種のものの中では未曾有の出来事であつたと言つてよい。

しかし、小田原の明治時代には、これ以前にも、しばしば海しようの被害に見舞われているのである。明治十年七月二十六日から八月十日にかけてのものも大きく、被害は流失一五戸、全潰六五戸、半潰三四戸、大破二五戸に及んだ。

次いで明治十三年十月四日の大風浪では死傷二十人を出し、市中家屋の被害も多かつた。明治二十五年九月十二日の激浪には海岸住民が避難までして、被害は殆んどなかつたが、明治三十二年十月七日の大浪の被害は、明治十年のに匹敵するもので、死亡二人、負傷二十人、全潰八戸、半潰五十戸を出したのである。そして、その後僅かに三年目の明治三十五年に、この大海しように襲われたのであつた。

この年九月には、すでに四日の午后から大激浪が始まり、五日には半潰十戸、破壊四戸、浸水一〇〇戸、負傷者数名の被害をもたらしたが、波浪は一進一退をくりかえしつつ二十八日に至つた。早朝からの雨は午前十時頃から小降りとなり、午後には晴れそうな空模様となつたが、夜来からの激浪は高さや震動を加える一方で、遂に午前十一時最高、最大に達した。数丈の高浪は防波堤を越えて、大地をゆるがす震動とともに、陸地に押し寄せて、人家を潰し、船舶、橋を押し流し堤防、道路、田畑を破壊し、人畜に死傷を与えて、午後一時頃まで、

殆んどまる二時間に亘つて荒れた。

当時の調査による被害状況は、小田原町のみにて死亡十二人、負傷一八四人、全潰一四四戸、半潰六九戸、破壊五十五戸、流失二九三戸床上浸水三〇〇戸、床下浸水七〇〇戸に上り、これも被害をこつむつた沿岸一町（小田原町）一二ヶ村の総計で見れば、死亡六七人、負傷者二六四人、家畜の死傷一七三匹、全潰六三四戸、半壊二八三戸、流失二七三戸、床上・床下浸水一、七二五戸、流失、沈没の船舶二五三隻、破損船舶二九九隻に上る大へんを被害を出したのであつた。

◎明治三十六年四月二十五日

電話が開通した。

◎明治三十七年五月十三日

郵便局が開局した。

◎明治三十八年四月

小田原新海岸堤防が完成した。

◎明治三十九年十月

小田原・熱海間の人車鉄道が軽便鉄道となつた（熱海軌道株式会社）

豆相人車鉄道株式会社を熱海軌道株式会社と改名して操業を開始し人車当時の軌道を利用して、その上に蒸気軽便車を走らせたのであるが、大正七年（一九一八）度の調査によれば、その年、十四萬三千二百八人の乗客を輸送している。それ故、人車鉄道と軽便鉄道が、明治後半から大正期にかけての三十年間、東京・小田原・熱海間の交通機関としての役割は多かつた。

◎明治四十年九月

山県有朋が別荘古稀庵を建設した。

明治の元勲山県有朋が小田原板橋の丘上に別荘古稀庵を営んで住むようになったのは明治四十年九月からであつた。

有朋はこの年に年令七十才に達したので、ここを古稀庵と名付けたのである。住居としては、東京目白に邸宅椿山荘があり、小石川には夫人貞子の住宅なる更々亭があり、京都南禅寺に別荘無隣庵などがあったけれども、古稀庵を営んでから晩年の大半はここに住み、大正十

一年二月一日、八十四才で歿したのもここであつたから、小田原古稀庵の名は天下に知られたものであつた。

古稀庵における山泉有朋は小田原の大御所と言われた。有朋が別荘古稀庵を建てたのは、功成り名を遂げた余生を送る目的であつたが、国家の元勳として皇室の親任は厚く、又権勢を持っていたから、人呼んで小田原の大御所と言つたのである。国に大事のある時は勿論だが内閣の改組、時には一閣僚の交代まで、為政者が意見を叩き、指示を仰ぐという次第であつたから、往訪の大官が後を絶たない有様で、古稀庵訪問を世に小田原詣と称せられた。

◎大正四年

閑院宮家の御別邸が建設された。

閑院宮載仁親王が、御用邸と相對する城西天神山の丘上に、約一萬余坪の地を拓いて、宏荘な御別邸を建設された。御別邸と言いなながら殿下は小田原の風光を特に賞でられたので、ここに住居されるが多かつた。それで関東大震災にも御別邸で遭遇せられ、昭和二十年五月二十日（八十才）に薨去されたのも小田原であり、ほとんど御本邸の如くであつた。

◎大正七年

北原白秋が木兎の家を建設した。

北原白秋が小田原に来たのは、大正七年二月で、白秋三十四才のときであつた。

そして、最初に住んだのが小田原十字四丁目九一〇番地（南町三丁目五番二三号）通称お花畑といふところに、妻章子とともに二階を借りて住んだ。お花畑の生活もその年の秋に切りあげて、十月には、十字町天神山にある伝摩寺の本堂のそばの一室を借りて移つた。

白秋の小田原生活は、前後約八年間であるが、この間の彼の詩作一すじに精進した努力が、遂に実を結び大正詩壇の隆盛を呼び起して彼はいつしか、民謡の先駆者と仰がれ、詩人の第一人者の地歩を占めるに至るのである。

そしてまた、我が国の童謡運動が、彼の活動によって次第に盛んにな

るのである。そして彼自身、この八年間の小田原時代は、試練時代への訣別と晩年への安定を意味する生活でもあつた。白秋は漸やく貧窮から脱し初めていた。お花畑の寓居から、天神山の伝摩寺の一室に移つた白秋は、その翌年の大正八年と九年とには、小説と散文に没頭して、次々と「中央公論」「雄弁」「大阪朝日」などの雑誌や新聞に発表し、その稿料と、九年十月に出版された「雀の生活」の印税によって、永い間の窮乏生活からまぬかれることになつたので、伝摩寺の間借生活に終止符を打って、いよいよ独立の住居を寺の東側の竹林中に建設することになつた。白秋が初めて自から建てた住宅であつた。これが有名な白秋の天神山の山荘である。山荘は二疊の方丈と、四疊半の寢室からなる朝鮮風の建物と、もう一つ、彼がかつての小笠原生活の印象から得た、小笠原風の萱葺屋根に藁壁の「木兎（みみづく）の家」の二棟で、大正八年夏に出来た。

そして、その翌九年六月に、更にこれに隣接して二階建の洋館を建てた。そしてここで章子夫人と離婚をした。この離別事件は、恐らく白秋の最後の試練であつたろう。

大正十年四月になり始めて正式に迎えた佐藤菊子と小田原山荘で結婚をしたのである。この時、白秋は年三十七才に達していた。この菊子夫人は、温順で教養も高い人であつたので、白秋もここにいたって、初めて良縁を得て家庭の幸福を得るようになって、平和の中に創作一途に精進することになつたのである。

そして翌十一年三月長男隆太郎が生れ、更に大正十四年六月には長女算子が誕生した。

白秋は、この小田原山荘時代の半において、関東大震災に襲われた。山荘は不幸中の幸にも倒潰はまぬかれたが、半壊して廢屋同様になつてしまつた。もし関東の大地震がなかつたらは、彼はもっともっと永く、あるいは生涯この山荘に住んだのではなかつたかと思われるが震災で痛手をうけた半壊の山荘で創作一筋に打ちこんでいた白秋も、破屋時代二年半を越えて東京に移ろうと考えるに至つたのである。かくして、大正十五年四月、東京谷中天王寺嘉祥の家に移つた。しか

し、白秋は、その年の十月四日から七日まで都新聞に載せた「谷中の秋」という文に、「まったく小田原の天神山はあらゆる星座の下に恵まれていた」と述べ、最後に「つくづく小田原の壊れた木兎の家に帰りたくなっている」と文を結んで、小田原へ無限の愛着を示している。

◎大正九年六月

湯本、強羅間の登山電車が開通した。

小田原電気鉄道株式会社(昭和三年八月箱根登山鉄道株式会社と改名)は大正九年(一九二〇)六月、湯本から強羅までの登山電車を開業し、翌年には早雲山のケーブルも運転を開始した。そして昭和十年十月一日には、小田原駅乗り入れを行なった。

◎大正九年十月二十一日

東海道熱海線が小田原まで開通した。

熱海線は、明治四十二年(一九〇九)十一月に箱根別線と名付けられて実地調査に入ったのに始まり、後に熱海線と呼ばれて、大正五年(一九一六)十二月から工事に着手したものであるが、小田原の新駅が開設せられて、国府津、小田原間の六・二キロメートルが開通した記念の日は大正九年(一九二〇)十月二十一日であった。続いて大正十一年(一九二二)十二月二十一日根府川駅が開業、翌大正十二年(一九二三)真鶴駅が設けられたところで、九月一日の大震災にあり、大被害を受けたが、復旧して、大正十三年(一九二四)湯河原駅、大正十四年(一九二五)三月二十五日に熱海駅まで開通したのである。

◎大正十一年二月一日

山県有朋が古稀庵で没した 八十四歳

◎大正十二年九月一日

関東大地震によって小田原が大被害をうけた。

大正十二年九月一日、午前十一時五十八分、小田原は突如として大地震に襲われた。これがいわゆる関東大地震で、もちろんその災害は関東地方一府六県に亘り、二十萬の生霊を奪い、至るところに史上未曾有の惨状をもたらし、その最も震度の激しかったのは小田原地方で従って被害も大きかった。

小田原町の災害状況(小田原警察署調)

人口 二六、六六八人の内

死者 三七〇人 傷者 一、九八〇人

行方不明 四人 全潰家屋 一九四五戸

半潰家屋五〇一戸 全焼家屋 二、一二六戸

根府川方面の山津波状況

一三三戸 八五八人の内

埋没 八四戸 死者 四〇六名

全滅 一五戸

米神方面の山津波状況

一〇一戸 七八九人の内

埋没 二〇戸 死者 六二人

◎大正十四年十月

大雄山鉄道が小田原・関本間に開通した。(駿豆鉄道株式会社)

◎昭和二年四月

小田急線新宿、小田原間が開通した。

◎昭和九年十二月一日

丹那トンネルが開通して、熱海線が東海道本線となった。

◎昭和十一年三月

小田原上水道が通水を開始した。

◎昭和十五年十二月二十日

足柄町、大窪村、早川村及び酒匂町の山王、網一色地区を合せて市制を施行した。

(面積五七平方キロ、人口五四、六九九人)

◎昭和二十年八月十五日

太平洋戦争の戦禍をうけて万年、幸地区の一部が焼けた。

◎昭和二十二年五月

六三制による新制中学校が開校した。

◎昭和二十三年四月一日

下府中村と小田原市が合併した。

◎昭和二十四年

小田原漁港の工事が開始された。

◎昭和二十四年八月二十三日

小田原競輪が開始された。

◎昭和二十五年十月三十日

足柄上郡桜井村が小田原市と合併した。

◎昭和二十五年

市制施行十周年記念事業として子供文化博覧会が開かれた。

◎昭和二十九年七月十五日

豊川村が小田原市と合併した。

◎昭和二十九年十二月一日

酒匂町、国府津町、上府中村、下曾我村、片浦村が小田原市に合併した。

◎昭和三十一年四月一日

曾我村の一部が小田原市に合併した。

(面積一〇四・七四平方キロ、人口一六一六、二五二人)

◎昭和三十五年五月二十五日

市制二十周年記念事業として小田原城天守閣が復元された。

◎昭和三十七年三月十日

鈴木英雄名誉市民第一号となる。

◎昭和四十年七月十二日

河野一郎名誉市民第二号となる。

参考文献

一、小田原近代百年史(中野敬次郎氏著・形成社発行)

二、小田原市史料(小田原市発行)

明治百年雑記

酒匂川決壊と水害状況

井上英一(小田原史談会会長)

明治百年を推慕してみると数々の出来事も多数あるが、何と言っても我等二官金次郎の誕生地相山に生れた者にとって、酒匂川水害の度重なる被害を思い出さずにはいられない。そこで今度それ等に関する資料を私の先祖が記した日誌より発表する次第である。

堤防規則書

御布告

今般治水之規程改正之為メ土木司中ニ検査掛リヲ置キ諸国全川ヲ分部シ掛リ官員常ニ分布ノ川筋ヲ巡視シ地方官ト力ヲ織セ治水ノ方法実地点檢候条府藩県ニ於テ自今水理関涉ノ事件ハ勿論別紙条目ノ件ハ總テ土木司ト合議シ可否ヲ極メ可申立猶細目ノ儀ハ民政部省江可承合事

別紙条目

第一条

一、川筋紛乱ナキタメ千間毎ニ堤外ニ定杭ヲ建一面ニハ水量ノ尺度ヲ記シ一面ニハ番号ヲ記シ川敷幾町幾間ト記スベシ又堤内百間毎ニ小杭ヲ打チ番号ヲ記シ堤ナキ所ハ川ト山トノ分界ヲ正シ川敷ヲ定ムベキ事但在来ノ水量杭ハ廃止スベキ事

第二条

一、前条諸川境界ヲ定メ境内水行ヲ妨ルノ類ハ取払ヒ租税免除ノ場所ハ何ノ上可取計且自儘ニ擡上土手等築立候儀嚴禁タルベキ事

第三条

一、堤上堤外ノ竹木堤ノ根堅メニ相成ベキ分ハ存シ其余ハ三月ヲ限り伐払ベク蘆葦川柳ノ類ハ六月限リトス
但 川ノ広狭ニヨリ堤外区間或ハ三間ヲ堤脚ト定メ堤脚ニ有之竹柳

ハ存スベシ
竹ハ六尺上ヨリ伐払ヒ柳ハ三年毎ニ土際ヨリ伐払堤ノ固メ水利ノ用ニ供スベキ事

第四条

一、堤防修築ニ用ユル諸色々ノ儀閑東其外総テ仕来リニ拘ラズ其所平均直段ニ改メ物価ノ高下ニ依リ二年或ハ三年ニシテ改制スベキ事

第五条

一、諸川水路要所ノ地ニ簾ヲ張り又ハ樹枝ヲ埋ムルノ類大ニ水行ヲ妨ル条自今一切嚴禁ノ事

第六条

一、堤腹ヲ侵襲シ官道ヲ縮耕スルノ類最モ嚴禁タリ自今其官轄庁ニ於テ取締致スベキ事

第七条

一、自普請ヲ以テ縦々ニ堤防ヲナシ水勢ヲ減シ前岸上下ノ害ヲナス者少ナカラズ自今自普請タリトモ水別土出シノ類ハ一応土木司申談施行スベキ事

第八条

一、堤防締役ヲ其最寄郷村ヨリ拔萃シ凡二里或ハ三里ヲ一人ノ持シ榜示ヲ建テ境界ヲ定メ規則ヲ守リ平日水行ヲ点検セシムベキ事

第九条

一、普請土取石取坪掛リノ人足ノ儀仕来リニ拘ラズ町数ニ遠近ヲ書載セテ可申事

辛未正月

太政官

以上ハ(明治四年正月 井上家第八代 八郎右衛門時代)

◎ 酒 匂 川 決 壊

一、正徳四年(一七一四)三月十一日
洪水ノ為メ會比村宗繁寺堂宇悉皆流失
(正徳四年ハ徳川家康薨去後九十九年目)

(第三代八右エ門時代)

一、享保九年(一七二四)
七世僧性育見ノ時再建ス

(第三代八右エ門時代)

一、安政二卯年(一八五五)五月十九日

會比村土手押切り東栢山仙了西東上手會比境ヨリ不残流失同年八月會比堤防切出来ス

(第七代忠右エ門時代)

一、安政四巳年(一八五七)五月十八日四ツ時

吉田島及比會比締切ヲ押シ切り卯年ノ流レヨリ甚ダシ會比ニテハ土蔵本家馬屋其外小家トモ五十有軒流失セリ會比ニテハ村内通行叶ハズ舟ニテ渡リタリ

(右 同)

一、安政五年午(一八五八)七月廿七日

東栢山三ヶ村水門際切込ミ防禦中中會根村へ切込ミタリ

(右 同)

一、安政六年未(一八五九)七月廿五日

金井島村境ヨリ九十間祖師堂附近マデ押切りタリ同年八月大水ニテ小沢家裏門通り一面海トナル

(右 同)

一、萬延元年申(一八六〇)七月二十日

東栢山字横マクリ喜右エ門下百五十間押切りタリ

(右 同)

一、文久二年戌(一八六二)八月一日

東栢山三ヶ村下中會根嶽東横マクリマデ押切りタリ

(右 同)

一、明治元年辰(一八六八)五月十三日ヨリ十八日マデ防禦ノ処十八日昼八ツ時頃ニ揚リ立ニテ押切りタリ

同年七月十五日ヨリ十八日マデ夕刻大風雨ニ川立(二重締切り)締切十八日夜四ツ時頃ニ至リ家床上ニ泥土一尺五寸程堆積セリ

八月五日大雨出水村内通行止トナリタリ
八月十八日夜大風雨ニテ八乙女神社流失シテ御神体ノミ無事

一、明治三年午（一八七〇）七月十九日
東栢山三ヶ村上ヨリ横マクリマデ流失
（第八代八郎右エ門時代）

一、明治三年午（一八七〇）八月十二日
吉田島字中土手堤防押切り大字會比以下被害夥タシ
（右 同）

一、明治八年亥（一八七五）八月十日
吉田島村字中土手堤防押切り大字會比以下被害甚ダシ
（右 同）

一、明治二十九年申（一八九六）九月二十五日
吉田島村字中土手堤防押切り大字會比及比栢山等床下マデ浸水以下関
係村々田面濁流氾濫稲作ノ被害多カリシモ夜ニ至リ向フ側ノ金田村金
手ノ堤塘押切りタルタメ翌二十六日早朝ニハ一掬ノ水ナシ入々奇意ノ
思ヒアリ

此締切工事ニ付テハ高六尺巾九尺位ノ野面石垣ヲ築キ立テ尙ホ官費ニ
重緒切ノ工事ヲ施セリ右石垣築立ハ吉田島村下部桜井村會比栢山及ビ
足柄下郡元富水村ノ内堀ノ内飯田岡蓮正寺小台新屋清水清水新田柳ノ
八大字参加セリ費用ハ夫役ナリ
（右 同）

一、明治四十年末（一九〇七）八月二十四日並ニ九月十七日十八日ノ大
洪水
桜井村大字會比字下水門下堤防決潰流域二分シ一ハ桜井村役場正北ノ
上ヨリ仙了川ニ入り川ノ兩岸堤ヲ破壊シ足柄下郡足柄村（旧富水村）
ノ内小台新屋穴部其他ノ各字田地ノ被害多大ナリ

一流ハ桜井村役場東方面ヲ大字東栢山ヨリ（元富水村）ノ内堀ノ内飯田
岡蓮正寺ノ各大字田地ヲ荒蕪地ニ變セシム
仙了川ヲ押切り狩川ニ入ル

前記 被害反別地価其他調査左記ノ通り
一、大字會比ノ内字土手間新河原下河原

此反別九町一反九畝歩

筆数三百八十三筆

地価金二千五百七十六円二十四錢

外畦畔反別一町四反五畝七歩

一、大字栢山ノ内字坂口大小中丸宮ノ上、道上道下、中新田、中島、
大丸、土手庭、仙了添

此反別二十八町一反二畝二十五歩

筆数千五十一筆

地価金八千四百四十九円八十四錢

外畦畔反別 一町七反二畝十七歩

内畦畔反別 十九歩

（第九代 友信時代）

一、明治四十三年戊（一九一〇）八月十一日

八月一日ヨリ六日マデ雨降り続キ七日天候一時快復スル模様ナリシガ
午后三時頃俄カニ大雨トナリ間断ナク八日九日十日ト降り続キ十一日
午前一時頃字三ヶ村堤塘長百九十間決潰東栢山住民居宅全部浸水一部
ノ流水ハ栢山神社上ヨリ西へ出テ足柄下郡足柄村堀ノ内飯田岡蓮正寺
ノ各字田地ヲ害ヒ一部ハ同郡富水村字中會根蓮正寺へ氾濫シ住宅小家
ノ流失田地宅地等ハ被害ヲ及ボン狩川ニ出テ酒匂川ニ入ル
十三日未明ヨリ終日強雨夜十一時頃益々増水シ元ノ決潰口ヨリ水勢奔
騰會我藤太郎方宅地東北面ノ田ヒ高サ五尺餘ノ防堤上ノ竹林中へ土俵
ヲ積ミ重ネ内部へノ浸入ヲ防禦得タリシガ（此時村内小田原往還ハ諸
方面ヨリ押込ミタル水ハ肩ヲ没シ通行叶ハズ）十四日午前二時頃ニ岡
部浅次郎ノ水車一棟ヲ流シ漸次ニ宅地ヲ洗ヒ去リ居宅小屋馬屋土蔵ヲ
瞬間ニ流失次テ會我政吉、會我和吉、高井若次郎、岡部兼太郎、瀬戸
豊太郎、中戸川金太郎、中戸川圭造、岩田邦藏、岡部波之助、會我栄
太郎、會我謙太郎、黒柳常五郎ノ十三戸ノ居宅及ビ附屬タル灰家十二
棟廩十一棟物置三棟土蔵三棟水車五棟ヲ流失スルノ慘状ヲ極メタリ

前記水害ニ依ル被害反別地価左ノ如シ
大字栢山ノ内字宮ノ上道上、道下、古屋敷下、柳ノ町、苑分、中ノ

町、中島、山道下、中新田
此反別三十二町四畝二十二歩

千二百四十一筆

地価金九千八百四十五円三十二銭

外ニ宅地反別一町四畝二十八歩

地価金二百八十三円三十二銭 拾六筆

備考 曾我フサ 二宮豊蔵 岡部直右エ門三名ハ地上物件ナキ宅

地ヲ買受ケタルモノ即チ前掲十三戸ニ加ヘ十六筆トナル

総計 反別三十三町九畝二十歩

地価金一萬百二十八円六十四銭

(以上第九代 友信時代)

明治百年に際して

清水専吉郎 (小田原史談会副会長)

昭和戊申四十三年即ち明治百年(皇紀二六二八)に当り、明治戊辰の大転換期を遙かに省察して、徳川幕府三百年の鎖国大平の夢覚めし如く隔世の感あり、幕末諸藩はその就去に迷い大困乱に陥れる様相を忍び明治維新の大改革の非常時期を追想す。勤王、佐幕両論の軋轢を経て御幼年の明治天皇の御東行に世は治まり、江戸に遷都し東京となり、明治大正・昭和と三代に亘る変遷を見るにつけ、封建機構の解消、家族制度の廃止、民主主義の勃興、自由主義の過剰等々の一世紀に当面して先人を追懐し温古知新以て吾人は将来に備えんとするものである。

慶応三年大政奉還となり、翌四年即ち明治元年(西歴一八六八)戊辰五ヶ条の誓文に明治維新の大業なり、所謂文明開化時代を経て、日清、日露の戦捷を獲得し、日韓合併、満鉄偉業等国威揚れり、それより第一次大戦、関東大震災を克服せる。

満州事変、支那事変より大平洋戦争に入り、惨々たる辛苦を国民は身に浸みて味はい、大敗焦土を漸やく建て直し、半世紀の後退を急速に取り戻し、今や寧ろ戦前に増して物資並に国勢の進展せるを見て転た感慨を深くする。

慶応と明治初年に吾が小田原も亦、武士も町家も困惑し、変革せる有様を今更に想ひ反さんとす。即ち当時町家は脱走組に恐慌し、武士は藩論と俱に困乱し、官軍、幕軍いづれえか就去に迷蒙し大なる犠牲者を出し、時勢に押されて遂に山崎合戦、箱根関所の戦い等、当小田原が明治維新に関連する処を近き機会に歴史の専門家に此史談誌に詳記されたと希うものである。

小田原の交通が人力、馬車より馬車鉄道となり、電気鉄道に開化し進んで自動車の氾濫に軌道は撤去せられ、バス交通となれる変転や、国鉄の新幹線の超特急停車駅となれる発達など、それに付けて宿場街の盛衰、町村より市制への進展等「明治は遠くなりけり」と雖も連想すれば吾等の遭遇せる時代に、身近かの事々の回顧に指呼の間とも思はる。

折しもあれ当史談誌の五十号を越ゆるに際し、小田原史談会の明治百年の記念事業として、各自の身近に見聞せる事柄を、昔話し式にても結構、寺小屋と学校初期の経験とか、地域の変遷、近所隣りの変り様、昔よりの云い伝え、其人の祖先、昔の出来事、消えなんとして現に続ける場所、有名な屋敷跡、残して置きたき物語、等々所謂野史の貴重さを纏めて冊子と為すべく、昨年十月及び十二月の理事会に於て此計画を取決められたは史談会の各位は奮って御寄稿あられたし。私は関係ある北条時代豆州下田の鵜島城跡の事、十六代の祖先の事、小田原宿の本陣脇本陣の事、明治天皇御東幸御宿の事、小田原駅通より郵便局創始の事、小田原謡曲界の藩時代より今に至る事蹟など身近かなるものを記載する所存である。

各位一人も多く見聞せる史実を筆筆せられて明治百年一世紀の一翼を担われたく、且又此昭代に生れ合せたる足蹟を止められ、後世に伝へ遺さるべく多数各位の原稿を寄せられん事を切望する。

小田原郵便局の始めと変遷

清水 専 吉郎

小田原郵便局の始まりは明治四年（一八七二）に宿駅制度が伝馬所と共に廃止せられし直後に小田原宿（宮の前町の町年寄清水伊十良（清水家十三代伊兵衛豊充）が自宅にて郵便局事務を小田原郵便局取扱所として（現古清水旅館の処）に開始したのである。

清水家は北条時代伊豆下田の鶴島城主清水上野守正令（清蓮院殿前上刈刺史日厳大居士）その舎弟清水右近将監正豊（善尽院殿淨把日往大居士）兄弟の裔で、祖先を同じうし、北条氏落城後戦国時代を過ぎて徳川江戸時代に至り、小田原に於て兄家大清水が本陣、弟家小清水が脇本陣を営み、明治維新後は大清水の家屋は学校となり、小清水は旅宿となり清水伊十良が町年寄を勤め、又宿問屋場を営みたり。

旅宿関係より当時の駅通総監前島密氏が属々来宿され（文書、道具等関東震災にて焼失）最初の小田原にての郵便局の通送、配達、貯金等の業務を為し、宿駅の伝馬所一変して郵便取扱所となる。当時清水の郵便局と云って後まで称せられたり。

現小田原市経済部商工課山本道夫氏編著する昭和四十二年二月一日発行の「小田原の郵便」は岡氏丹精の結集初めて締められた郵便局変遷の歴史冊子である。それを余考として聞き伝えし、変転を記せば、明治十一年に小田原電信分局が高梨町（現本町三丁目一）に新設されたり、それより数年後、清水家十四代豊寿の時、福住正兄などとその当時和歌の友である薬種商で書家である小西正蔭へ郵便局を引次ぎ、明治卅一年より元小田原藩の家老の家である当時町助役の杉浦久珍が自宅の唐人町（現本町二丁目六）の表通り南側今の国際劇場の西隣に郵便局を引次ぎたり。明治卅七年今の交番の裏の処に木造新築して郵便局は移され戸田氏が局長となり、次に土屋氏となりし頃従来等局が三等局と格下げされたる事を中田寿一郎邸の謡会の時に話に聞きし事ありき。それより明治四十

四年今の横浜銀行の東隣り小沢金物店の処に二階建の木造局舎が出来、電話交換事務も行はるゝやうになって大正十二年二等局に昇格したる後関東大震災に会い、焼失せし後、元の松の湯の場所であった現在の警察署の隣り（本町一丁目十三）に鉄筋コンクリートの局舎となったのである。

変転極りなく電話局は裏隣りに分れ、隣りの警察署も近く堀端の元市役所跡（其元小学校）へ引越す予定なりと。懐旧すれば警察署もその以前には十字町俗称筋違橋（本町一丁目十三）ういろいろの西隣りにありしものなり。

上述の如く小田原郵便局は明治四年に始まり、清水伊十郎より廿八代鍵和田茂夫氏に至るまで今年明治百年即ち昭和四十三年にて小田原郵便局開設以来九十七年間を経て現在の処に盛況を為せり。

明治百年小田原の謡曲界懐古

清水 専 吉郎

小田原藩時代謡曲に携はれし人に十字町瓦長屋今の南町天神社前通りの北側に古田、山下、近藤、三氏とお堀端通り幸田門寄りの東側に藤沢氏あり、氏四氏が観世流謡曲の師匠にて藩より手当を受けし由古老より聞き及べり。私の父清水伊兵衛も此藤沢氏に謡を習いたり。

明治三十年観世流廿三世家元観世清康師が小田原に來り鷗鳴館と琴清館とにて謡会を催せり、それより小沢良輔師が中田寿一郎氏方へ來られ廉謡会を創立せり。

中世小田原にての謡曲界明治、大正時代有名なりし人に、西岡逸明、神原富文、益田勘左エ門、鈴木英達、清水伊兵衛、松本栄太郎、長谷川弥三郎、中田寿一郎、江良本三郎、石川仙助、磯部伯治、和田弥太郎、田口為八、本多成二、江島平八、高井作次郎、染本染太郎、篠窪行雄、岩下鉞之助、の諸氏がその道に達者なりき。

大正年代より当時新界に第一人者とも云うべき中田寿一郎氏は美声の

小沢良輔師に就き蘊蓄を極められ瓢声会を創立して盛大なりき。

中田氏は弁護士後に小田原町長の繁職の中を通じて実際に能く子弟を師道せられたりき、中田氏は東京へ裁判所用事に上京の時折に私の父と俱に観世清康師家えの処へ赴き師事せられたり、大正年代より私も瓢声会に入り中田先生に、奥津惣太郎氏、中津川吉蔵氏と共に懇切に教を受けたり、奥津惣太郎氏は小田原に最初の観世流師範となられ、次に中津川吉蔵氏が師範となられ、昭和廿六年一月に至り清水専吉郎名譽師範となれり。

一方梅若流は大正より昭和の初めまで、鈴木新太郎、勇次郎、亥三郎各師が順次小田原へ出張せられ、高井作次郎氏を中心に梅鈴会と称し之亦盛んになれり。他方石川仙助氏の謡教室もあり、板橋なる益田孝男爵邸に梅若萬三郎師来られ其御弟子、辰雄、春雄、萬佐世、三師交互に来られ、その折に其教えを受けたる人々に私も加わり、昭和三年十月重習碇の免状を十三世梅若萬三郎師より受けたる事は、同じく既に大正四年三月九番習免状を岩田忠介氏が受けられしものと照合し書式、印形全く同一にて、今日よりすれば誠に珍重のものなり。

大正十二年関東大震災後数年と昭和十四年より十六年大東亜戦争後数年八ヶ年位は中絶し、謡曲界全般は聞き及ぶ明治維新当時の謡曲界頻波の状態に梅若実が辛うじて支えし如く全く下火となりし、空白時期の資料は無けれど其後の当小田原謡曲界は復興と共に盛んなり詳細の番組資料存す。観世鉄之亟家にて師範となれる星崎静夫氏が、昭和廿二年鉄之亟師を古清水旅館に案内して小田原にての稽古を甫じむ後に小田原鉄仙会を創設しそれより此地方は追々元へ復し、斯界隆盛となれり。

小田原地方の謡曲には井口丑二原作齊藤香村再調せし二宮を観世喜之師之れを節付し、昭和十六年四月十六日二宮神社にて観世喜之、大館省三清水専吉郎三師地にて社殿に初めて披露し謡はる。

謡曲国府津は国府津真楽寺に古存せる版木を発見し、親覧上人作として寺主平氏より乞はれて東海俊美、清水専吉郎両氏にて之を版木より印刷し読み但つ謡ひ、文字節付を其章通り写書して謡本となし、昭和三十五年四月廿五日謄写版本となせり。

昭和卅五年十一月小田原文化祭に、二宮、国府津、小袖曾我、討曾我と此地方に因める曲の謡会を難波明氏の斡旋に依り、史談会催しにて此年より文化祭に加はれり、翌卅六年十一月五日小田原文化祭に二宮、国府津を主に外五番を教育委員会、史談会、謡曲連合会共催にて大会を本町小学校講堂に行へり。之より翌卅七年文化祭の第十回として、以後毎年文化祭に謡会を組入るゝ事となれり。

城下町として小田原は謡曲界隆盛に諸会三十を数ふる程にて、今はその師範の人十八名現存し、明治大正より今日まで半世紀餘の番組百五十枚保存しあり、湮滅を恐れて他日小田原謡曲史料として編纂せんと存念す。

「小田原を中心とした交通年表百年史」

額田喜代春 (小田原史談会理事)

今秋小田原史談会で明治百年に因んだいろいろのことを「明治百年史」編集の予定であったが、原稿が盛沢山で載せられないので、私はとりあえず「小田原を中心とした交通年表百年史」のみに止め、何れ機会をとらへて、「ふるさとを偲ぶ乗物百年史」として発表する予定で、次の項目にわけて載せたいと思っています。

(昭和四十三年九月八日付、神静民報に「四十五年ぶりに里帰りする豆機関車」は右内容の一部です。)

中曾根運輸大臣の言葉を借りれば「新橋・横浜間に鉄道が開通したのは、明治五年十月十四日のことであった(明治五年五月二日品川・横浜間で仮り営業)。この鉄道の夜明けは、明治百年の開幕を告げるベルでもあった。」

小田原を中心とした交通年表百年史

(1) 明治 二年 七月 東京箱根間に乗合馬車走る。

- (2) 明治三年春 東京で人力車第一号誕生
- (3) 明治十年頃 小田原と近在を結ぶ人力車登場
- (4) 明治十二年、三年頃 成駒壺という馬車業者が、神奈川から小田原まで、乗合馬車をはじめた。
- (5) 明治二十年七月十一日 横浜から国府津まで鉄道が延長された。
- (6) 明治二十一年十月一日 国府津から小田原經由箱根湯本間に小田原馬車鉄道が開通(八哩三十八チェーン。軌間三呎六吋)
- (7) 明治二十二年二月一日 東海道線が御殿場回りで、静岡まで延長して全線が全通した。
- (8) 明治二十八年七月十日 豆相入車鉄道が熱海ー吉浜間開通し、翌二十九年三月十二日に、吉浜ー小田原間に延長。右によって小田原(早川口)から熱海間が全通した。
- (10) 明治三十三年三月二十日 国府津から小田原を經由して、箱根湯本まで、馬車鉄道のレールを利用して、小田原電気鉄道が開通、全線八哩三十八チェーンで軌間は四呎六吋となる。
- (11) 明治三十九年 政府は全国十七の私鉄を買収して、鉄道の国有化が行われた。
- (12) 明治三十九年十月 早川口ー熱海間の入車鉄道を熱海軌道株式会社と改称して、軽便鉄道に変更した。
- (13) 明治四十年十二月二十二日 国府津駅下海岸から伊豆まで、汽船の運航がはじめられた。
- (14) 大正五年十二月 熱海線の工事が始められた。
- (15) 大正七年四月一日 丹那トンネル工事が着手された。
- (16) 大正八年六月一日 箱根湯本ー強羅間の登山電車が開通した(八・九キロ)
- (18) 大正九年十月一日 熱海線が小田原まで工事完成。
- (17) 大正九年十月二十一日 小田原駅が営業開始(国府津小田原間六キロ二分)
- (19) 大正九年十月二十一日 鈴木益次郎氏が鉄道組という人力車組合(組員六十名)を作り、小田原駅にての構内営業を許可された(車両六十両)
- (20) 大正十年十一月一日 強羅から早雲山まで、ケーブルカーの運転が始められた(一・二キロ)が、大東亜戦争が耐わとなつて、資材提供を命ぜられ、昭和十九年二月撤去されたが、終戦となり昭和二十五年七月一日復旧した。
- (21) 大正十一年十二月二十一日 熱海線が真鶴まで延長された。
- (22) 大正十二年九月一日 関東大地震で小田原駅その他鉄道関係の被害甚大。
- (23) 大正十三年十月一日 湯ヶ原まで延長になった。
- (24) 大正十四年三月二十五日 熱海線が熱海まで延長になった。
- (25) 大正十四年十月二十五日 大雄山線広小路(小田原)岡本間開通。
- (26) 大正十五年二月二十六日 国府津ー小田原間の電化工事竣工、同時に東京ー小田原間の電気機関車による、列車運転が開始さる。
- (27) 昭和二年四月一日 小田急線の新宿ー小田原間が開通(全線九五キロ)。
- (28) 昭和三年三月二十五日 小田原ー熱海間の電化完成。
- (29) 昭和八年八月二十五日 丹那トンネル貫通。
- (30) 昭和九年十二月一日 丹那トンネル開通されたので、今までの熱海線という名称が消えて、東海道線と改称された。
- (31) 昭和十年六月十四日 大雄山線広小路(新小田原)から国鉄小田原駅に乘入れて、構内で連絡ができるようになった。(全線九・六キロ)
- (32) 昭和十年十月十日 箱根登山線が国鉄小田原駅裏口に乘入れて、従来の小田原駅から箱根板橋までの軌道を市

- (48) 昭和四十一年七月二十三日 湯ヶ原ロープウェイ(伊豆箱根鉄道経
- (47) 昭和三十九年十月一日 世紀の東海道新幹線が開業し、東京―新大
阪間ひかり号(四時間)、こだま号(五時間)
の運転を開始。
- (46) 昭和三十八年四月二十七日 駒ヶ岳ロープウェイ(伊豆箱根鉄道経
営)開通。
- (45) 昭和三十七年十月三十一日 東海道新幹線モデル線で二〇〇キロ試
運転に成功。
- (44) 昭和三十七年九月 東海道新幹線の新丹那トンネルが貫通。
- (43) 昭和三十七年六月二十六日 新幹線鴨宮―大磯間の試運転が行われ
た。
- (42) 昭和三十五年九月七日 ロープウェイ大湧谷―湖尻桃源台間開通(全線四・〇三四キロ)
- (41) 昭和三十五年六月一日 特急さくら号小田原駅に停車するようになる。
- (40) 昭和三十四年十二月六日 ロープウェイ早雲山―大湧谷間開通。
- (39) 昭和三十四年四月二十日 東海道新幹線工事着手。
- (38) 昭和三十二年十一月十六日 駒ヶ岳ケーブル開通(伊豆箱根鉄道経営)。
- (37) 昭和三十二年七月五日 小田急電鉄で新型ロマンスカー運転開始。かりの老松伐採さる。
- (36) 昭和三十年九月十五日 小田原駅前広場拡張整備完了、同時に駅前旭食堂前にあった小田原中学校時代からのゆかりの老松伐採さる。
- (35) 昭和二十五年十月五日 国鉄第一号の小便小僧小田原駅に誕生。
- (34) 昭和二十五年八月一日 小田急線が小田原から箱根湯本まで、従来の登山電車の線路に一本レールを増設して、三線となり新宿から箱根湯本まで直通運転となる。

内電車として残した。

昭和二十五年三月一日 東京―沼津間に湘南電車が運転された。

- (49) 昭和四十二年三月 小田原駅地下道拡張工事完了と同時に、エレベーター撤去し、テルファア―新設、小便小僧後方に移転。
- 外に小田原には直接関係ないが参考事項として次に掲載。

- (1) 明治六年一月二十七日 横浜発上り列車の煙突の火粉のため、蒲田付近の民家五戸焼失、これが沿線火災の始。
- (2) 明治六年六月五日 新橋―横浜間上等(一等)客に三ヶ月百二十円で定期乗車券が発売された(定期券の初より)。
- (3) 明治六年八月九日 新橋、横浜両停車場で雑品販売、各駅で新聞売子を許可。
- (4) 明治六年九月十五日 新橋―横浜間に貨物運輸開始さる。
- (5) 明治八年七月十日 旅客携帯手荷物を無賃扱とする制度始まる。
- (6) 明治十年十一月二十七日 日本人の手で六郷川木橋を鉄橋に改築工事完成。
- (7) 明治十八年十二月二十八日 日本鉄道KK宇都宮駅で竹の皮包みのにぎりめしに香の物つきで金五銭で売る。
- (8) 明治二十年(月日不詳) 国府津駅で東華軒が宇都宮と同じような駅弁をうりはじめた。
- (9) 明治二十二年五月十日 東海道線の列車に客車便所を取り付けたのが始まり。
- (10) 昭和二年十二月三十日 日本に於ける地下鉄は東京地下鉄道如上野―浅草間で営業開始がNo.1。
- (11) 昭和二十四年三月十四日 国鉄に於ける民衆駅第一号は豊橋駅。
- (12) 昭和三十二年六月二十日 東京付近の中央、京浜、東北各線電車の二等を廃止して老幼優先車に切りかえた。

03 昭和三十五年七月一日 列車の一、二、三等の等級制を一、二等の二階級制に改めた。 以上

二・二六事件の思い出

東海俊美 (小田原史談会理事)

昭和十一年二月二十六日は前夜から降り出した雪は三十年來の大雪であつた。

この日の朝まだ暗い早朝の雪空の中を第一巡羅線から帰って来ると「リリン リリン」としきりに電話が鳴っている。何だろうなこんな早朝からと、思つて受話器を手にすると「只今湯河原の伊藤屋旅館へ若い兵隊が五、六人で乗り付け機関銃や鉄砲をもって内大臣牧野伯を襲撃し警備員もやられたとの事、何時小田原へ来るか知れないから、直ちに早川橋で喰い止める様との命令であつた」直ちに配置についた。

こんな次第で湯河原の早朝の事件はすぐに知つたが、何事が起きたのか全ほうは私にはわからなかつた。勿論新聞もラジオも報道は差止められていたので、一般市民の方々は何も知らなかつた。私はすぐに早川橋に急行した。先ず「自動車に乗っている故知らん顔をして通過されては」と思い、近くにあつた杉の丸太を橋に横にわたし之で阻止しようとした。するとすぐ小田原の方面から漁夫が一人自転車であつてこれを見て大いに怒り大剣幕でどなつていた。平身低頭してあやまり、漸く勘弁して通つてもらつた。さて考へて見れば機関銃を持った兵隊を止めようとしても止る筈はない、強いて止めると撃たれるかも知れない。これは困つた。気が付いて見ると自分は制服のまま腰には剣を持っている。これではいけないと思つて制服をぬぎ捨て、付近の知人の浦井と言う家から仕事着を借りて着替へた。

すると警部さんが大急ぎで自転車でやつて来た私の姿を見ると「どうしてそんなかっこうで、自動車が阻止出来るか」とさんさん大目玉の

所へ署長が又自転車で飛んで来た。自分は命があぶないから仕事着に着替へましたと専ら弁明につとめた。「もし自動車が来たらそのまま先行をたしかめます。それからはその場の状況で適當な措置をとりますと答へた。

こんな風に、弁解やら、その場の措置をどうしたら等を打合せをしていた。すると早川駐在の高橋巡査が来た。そこで高橋駐在員にまかせて自分は十字町の角へ出て箱根方面へ行くか、閑院宮様へ行くか、又東京方面へ行くかと思案しながら張り込みを続け、七時半まで待つたが、自動車は遂に来なかつた。この時の湯河原襲撃隊による被害は次の様であつた。

部	長	皆川義孝(即死)
看護	婦	森 鈴江(銃創)
旅館業		山本亀三(銃創)
同		八亀広蔵(互にて負傷)

である。一日置いて二十八日の夜七時頃殉職された皆川部長の自動車が通過したので、小磯署長と私が自動車を止めて弔意を表した。感慨無量であつた。

五十年の板橋

小林泰助 (小田原史談会理事)

私が初めて小田原在大窪村板橋に来たのは、大正二年であつた。その時は、箱根から落ちる、すきとうるような清水が、小川に流れ、真に美しくよい処だと思つた。

小田原電気鉄道が、小田原町から板橋に来ていた。右側の各家の軒先をすれすれに運転していて、小供達の危険はあつたが、何事もなく、しかれて怪我をした人は、殆んどなかつた。

当時は焼死や、水死の事故や、殺人事件でもあると、新聞は大々的に報道し、街の話題の中心となり、大騒ぎであった。今のように何が起ろうと、又かと尋常茶飯事と平気で見てはいなかった。時代の変りは激しい。

鶴のようにやせた老人が、幾人もの女達に附添われ、田圃の畔道や、道路をゆるやかに歩いているのをよく見掛けた。何れ身分の高い人ではないかと思っていたが、板橋在住の山県公爵であった。

四月ともなれば、野山に桜の花が此処、彼処に咲き乱れ、殊に御塔山下の箱根街道は、車の往来も少なかったため、のびやかで桜並木の美しさには目を眩した。

板橋は維新以前は、かごやさんが多く、箱根越えの駅伝に従事していた。その名残りか、馬力屋さんが所々にあった。まだ自動車の利用もなかったため、馬の利用は運送上相当の仕事であった。

板橋には豪華な別荘が、いくつもあり村には相当の金が落ちた。今の山水旅館は元の大倉別荘であり、山県公は椿山荘、益田邸のは掃雲台と云い、何れも広い屋敷である。

益田邸に勤務されておられた、元市会議員市川将貴氏に伺ったところ、益田男爵は非常に殖産興業に関心を持たれ、殊に農業に対しては、種々研究しておられた。面白いのは邸内に始めて、トマトを栽培したところ土地の人は全然知らないで、気狂茄子と云って笑って相手にしなかった。

下河原の方も、昔は水害があつて心配した、明治四十四年は、殆んど流失したほど、ひどかった。最近も終戦直後にも、膝を没する被害があつて、住民は大変困った。今はすっかり堤防が完備して、住民も立並び全く面目を一新した。

五十年も経つと、いろいろ変わるものだ。

組のお稲荷さま

宇野応之 (小田原史談会理事)

私の住んでいる旧誓願町通りに昔から伝えているお稲荷さまがある。子供の頃毎年二月初午の日はお稲荷講と言つてこの日の子供達は大変楽しみにしていた。この日は当番の家に主婦が総出で煮物やら野菜をつくるやら大忙しをして子供達のごちそうをつくるのである。座敷の正面の机の上に白狐が二匹向き合つてその前に生の魚が大きい皿に盛つてありローソクの光りに映えて厳肅な気分をただよわしている。

この前にならんだ机の上の赤飯の三角のおにぎりやお煮しめ等々ご馳走を腹いっぱい食べたべ、そして帰りにお菓子をもらつて帰るのです。この稲荷講は今日に至るまで代々受継がれているのだが、古老に聞いても詳細がわからない。相模風土記によると現在の通りを山上横町と書いてある以下抜萃して見ると「山上稲荷社：今は山上横町にあり、当社は山上氏の屋敷鎮守などにてかく称するならん、されどその伝詳ならず。宝安寺持。

山上強右衛門久忠宅蹟(現在浜町一丁目五番二〇号)山上横町の辺なり。久忠は北条氏政氏真父子に仕へし人なり、山上家譜によれば久忠の祖父土佐守忠詮は江州山上に仕へし山上を以て家号とす。久忠騎馬三十騎足軽百人を預り天正十二年横地某を討ちその功により其のけつ地を久忠に賜ふ、小田原の役に山中城に使し中村武部少輔一氏の兵と一戦に及び武功を顕す七月氏真の出兵の時久忠一人を従し高野山に供し東照宮より御真判の御書を賜ひ氏真の歿後慶長七年十月召し出されて江州にて千石を賜ひ御使番を勤め関ヶ原の役にも供養す」とあります。

もともと北条氏は稲荷さまを厚く信仰し三代氏康は古新宿に北条稲荷を建てた人で領内の家臣も稲荷さまを信仰する人が多かったと思はれる山上氏も又その家臣も稲荷さまを信仰したと見えて私の町内には稲荷さま

がいくつも祭ってある。北条氏の滅亡後もこの山上稲荷社とこの祭りはその付近の人々によって受けつがれて来たらしい。

明治八年小田原町は町内を新玉萬年縁幸十字の五つの町に分けたので、この稲荷社は新玉分となり、管理していた宝安寺並に一丁田の人々は萬年分となつてしまった。そこでこの山上稲荷社を一丁田分の宝安寺境内に移してしまった。

この時に新玉分の稲荷社の付近の人々が稲荷さまを分けて頂いて組廻り持ちにして祭っているのだと言ひ伝えている。

組の古老の言ふには私の小供の頃(明治四十二年頃)誓願寺のエンマ堂の裏に一丁田の稲荷堂があった。

その後宝安寺の参門の脇に稲荷社が出来、その時組の白狐二体を領けたが、町内に悪病が流行したのでお伺いした所白狐さまの申すには仮家でもよい町内に帰りたいとの由、これ以後廻り番で春秋二回のお祭りを行う様になつた。とも言はれている。

この稲荷さまは二匹の白狐が向い合つてもう一つ小さな白狐がいる木造白塗りで高さ二十五センチ位でお姿も美しくなかなか立派なものである。さ程古いものではないが、江戸末期に作られたものらしい。

組では毎年廻り持ちに大切に保存している。その間にも色々と変事にも出合つた。大正の初め町内の火事にも危うく火災をのがれたし、又大正十二年の大震災火災にもこの稲荷さまを信仰し保管していた方がいち早く持出して竜巻と火災から救つてくれた事もあり、この稲荷さまは火災に強く、災難よけのご利益があると言われている。

本家の一丁田の山上稲荷社は昭和二十年八月十五日の戦災にあい焼失したまゝ社も失われてしまった。が、ご神体は心ある人々がひそかに廻り持つて祭っていたらしく現在は小生宅の稲荷さまと一所に祭つてある。山上稲荷さまはもとの町内にもどりたかつたのかもしれない。

小田原史談 第五十二号

(明治百年記念号)

発行所

小田原市城内三十二

小田原市郷土文化館内

小田原史談会

昭和四十三年十月二十五日発行

